

こしをしてできるだけ「原型」を復活するように努めた。先に刊行された『どうなる社会主義』（新興出版社刊）と合わせ読んでいただければ幸いである。今回も新聞連載中から反響の大きさに驚いたが、初めて手にされた方はもちろん、新聞で読みいただいた読者も、本書で改めて多くの「発見」をされたのではないかと思います。その時々々の展開にのみ追われることの多い私たちには、なにより歴史的に理解する上で大変参考になったし、またグローバルな視点の重要性を改めて教

えられた思いがする。

なお、今回のインタビュアーは、岩垂弘、伊藤三郎、両朝日新聞編集委員と新妻義輔・朝日新聞外報部部長代理が担当し、同東京企画報道室の帆足篠右、草薙聡志両副室長がデスクワークを務めた。本書刊行にあたってご助力いただいた新奥出版社のみなさんに、末尾ながらお礼を申し述べたい。

どうみる社会主義のゆくえ

1992年6月25日 発行 定価2060円
(税別)

社 室 朝 日 新 聞 道 社
章 林 新 興 出 版 社
行 所 東 京 都 十 代 田 区 神 田 神 保 町 1-30
〒101 東京都十代田区神田神保町1-30
☎ 東京(3295)0923 FAX 03-3295-5784
◎朝日新聞社企画報道室 1992 検印済止

宮本顕治氏 日本共産党中央委員 「ソ連型」が失敗 科学的社会主義は不滅	9
土井たか子氏 日本社会党代議士 嫌われた「体制」 社会主義に希望もつ	43
宮崎 勇氏 大和総研理事長 「主義」の時代は去る 現実在即した中国の開放策	57
堤 清二氏 センコーホーション会長 失った理論的生産性 中央統制強めソ連消滅へ道	73
若井 章氏 国際労働研会長 「崩壊」の断定は早い 搾取ある限り生命失われず	97
池田理代子氏 劇作家 自由の意思抑え之を 意外に柔軟な資本主義体制	113
猪木正道氏 平和・安全保障研究所会長 「法則」熟知とは傲岸な 最低生活保障努力は評価を	129
湯川順夫氏 朝日新聞記者 ロシア革命はお未完 スターリンにねじ曲げられ	147
加藤哲郎氏 一橋大学教授 生き続ける理念・理想 自由と解放を地球の規模で	163
藤田 勇氏 神奈川大学教授 当初から根底に矛盾 歴史的試みの影響は今後も	181
新田俊三氏 東洋大学教授 主軸は社会民主主義 ソ連や欧州の変化の求心力	197
熊沢 誠氏 甲南大学教授 新自由主義に警鐘を 社会主義がより人間的	207
辻元清美さん ビースポルト主催者 機会均等実現できず 特権層生まれ民衆に疎外感	223
森嶋通夫氏 ロンドン大学名誉教授 「計画」には必ず誤算 分権化すれば責任はつきり	235

宮本顕治氏「ソ連型」が失敗 科学的社会主義は不滅



著者 伊藤 丁
写真 朝日新聞フォトサービス

あとがき

293

弓削 達氏 フェリス学院大学
必ず動く我々の世界 考えてみたいどう変えるか

281

小田 実氏 作家
三種構造全部に矛盾 資本主義として勝つてはい

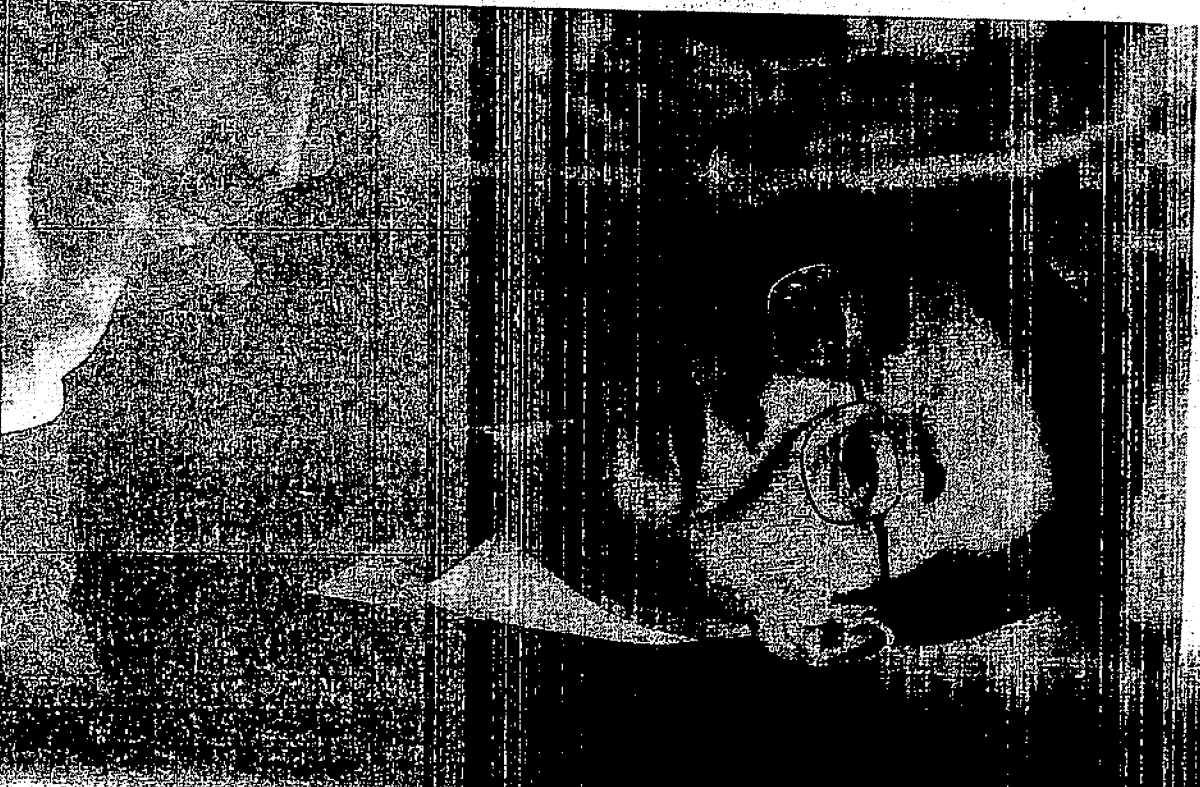
259

止はそのあとで、内戦があったりして止むをえない一時的措置として決められたんです。けれども、スターリンの時代にそれが固定化されちゃって、原則にまで祭り上げられ、分派禁がむしろ、民主集中制の正常な在り方であるかのように歪曲されてしまっただけですね。人々のこれまでの経験を考えると、止むを得ない側面もあることは認めるが、とにかく旧来への反発が強いあまり、ツアの時代の方がよかっただという声さえ出てきている。つまり、革命当時のことが忘れ去られているんですね。しかしツアの時代には、民主主義もなかったし、農民は土地もなかったし、抑圧政治だったわけですよ。だから私なんかには、待てよ、それはおかしいんじゃないの、というところがありますよ、感覚的には。

確かに、民衆がスターリン体制を倒したのは前進であつたし、政治的民主主義を勝ち取ったんだけれども、現に進行しつつある事態は、必ずしも人々の幸福につながる方向には向かっていない。現在は市場経済イコール民主主義という神話が圧倒的に信じられているが、現に登場しつつあるのは「強い政府」の要求である。それがないと、資本主義的な市場導人ができないという意見さえ台頭し、その方向が模索されている。それは民主主義の制限という形になつていく可能性がある。エリツィンには主観的にそういう傾向が強いし、ワシヤもそうなりたくて願望している。「斧をもつた政府」が必要だ、というのがワシヤのキヤッチフレーズですね。むしろ、非常に強権的な政府が待望される雰囲気になつてきている。これは問題です。

加藤哲郎氏 生き続ける理念・理想

自由と解放を地球的規模で



すでに八九年の東欧革命の時から、いろいろな議論があったわけですが、九一年八月のソ連共産党の解散で事態は非常に明白になった。私は、社会主義体制という言い方ではなくて、現存した社会主義とか国家主義的社會主義と呼んでいきますけれども、基本的には、フランス革命の理念を平等主義的に継承して生まれた一九世紀の社会主義思想が、二〇世紀に一つの現実の政治体制としてロシア革命によって成立して、それが八九年から九一年にかけて崩壊したということだと思えます。ですから、思想運動としては大体百六十年ぐらいいになるでしょう。体制ないし国家としては七十四年間存続したシステムの崩壊であつたんだと思えます。もっと大きく言いますと、こういうことだろつと思えます。一九一七年に資本主義の世界システムから部分的に離れ、その後、レーニン、スターリンたちがつくりあげた一國社会主義の対抗システムが、一九四五年以降に東欧諸國それから、中国などアジアの一部及びキューバに広がつたわけです。けれども、それは資本主義の世界システムに代わるもつ一つの全体システムではなくて、資本主義の世界システムの中の部分システムに留まるものだった。資本主義世界システムそのものの発展及び自己改造によって、部分的対抗システムのメトリックとされてきたもの、たとえば労働者や女性にも選挙権を与える大衆民主主義の確立とか、手厚い福祉政

加藤哲郎氏 生き続ける理念・理想 自由と解放を地獄的規模で

加藤哲郎(がとうてつろう)

一九四七年盛岡市生まれ。

名古屋大学助手、一橋大学の専任講師、助教を経て同社会学部教授。政治学専攻。著書『東欧革命と社会主義(花伝社)』『ミニマルの世界(筑水書店)』など。東京・国分寺在住。

策とか、労働者保護とか、経済計画という要素までが資本主義のシステムの中に取り込まれ、逆に、経済的に対抗システムとして維持できなくなつて、再度資本主義の世界システムに組み込まれたということでしょう。つまり、一九一七年に部分的対抗システムとして成立した現存社会主義のシステムが、七十四年かけて再び資本主義世界システムの中に戻ってきたということ

です。

資本主義にも影響

歴史的にみると、一九一七年段階で部分的システムとして抜け出ていった際のロシアは、もちろん資本主義世界システムの中心ではなかつたわけですし、かといつて当時の第三世界と言いますか、資本主義から隔離された周辺でもなくて、いわば半周辺でした。その半周辺から革命を始めて、それをドイツその他の中心国に及ぼして世界革命を達成しようというのが、レーニン及びボルシェビキの基本的な考え方でした。それゆえにコミンテルンという世界共産党組織をつくつて、それで西欧先進国及び植民地、半植民地を含め革命運動を指導し、世界革命を達成しようと考えたわけですが、しかし実際に起こつたことは、半周辺ロシアから起こつた革命を資本主義世界システムとの対抗で維持するのに精一杯で、第二次世界大戦後は資本主義の技術革新による高度経済成長の波に対抗システム側の側が乗り切れなかつた。そして最終的には、

アジア、アフリカ、ラテンアメリカと同じような意味での第三世界ないし周辺部に、ソ連、東欧地域が再度組み込まれてしまつた。そんな意味だらうというふうに考えています。

その崩壊の原因ということになりますと、経済的にはよく言われる議論ですが、国有化中心主義とか中央指令型の計画経済とともに、生産乃至主義に問題があつたということでしょう。政治的には、自由や民主主義の否定と一党制あるいは一枚岩的なイデオロギイの統合、思想、教育面での異論の排除の問題があつたと思います。

八九年の東欧の事態ばかりでなく、九一年八月のソ連の事態を含めて考えますと、私はこれは、レーニン・コミンテルン型の共産主義運動が全面的に崩壊したことだと捉えています。

つまり、東欧諸国の共産主義政党が倒されたというのであれば、これはソ連から輸出された体制、すなわち、それぞれの国のナショナルな伝統にそぐわない政治が民衆によつて排除されたということ、ある程度了解できるわけです。けれども、ロシア革命という世界革命の原点を担つた共産主義政党が、その国の民衆によつて打倒されたということですから、一八九八年のロシア社会民主労働党から始めて、レーニンが指導したボルシェビキというグループが率いてきた一つの世界的な革命運動、いわゆる国際共産主義運動が最終的に崩壊したことだと思

います。

また中国共産党に四千万人の党員がいるし、北朝鮮、ベトナム、キューバが残っております

けれど、少なくとも二〇世紀初頭に想定されていた、ロシア及び本来の目標であった西欧革命のための共産主義・運動が完全に崩壊したんだらうと思います。この意味では、レーニン・コミンテルン型の国際共産主義運動あるいは世界共産党というものが何であつたかということが、いま歴史の上で問われていると思います。あるいはロシア革命とはどんな意味をもっていたのか、というふうに言い換えてもいいです。

Q 資本主義の側が社会主義のメリットとされていたものを積極的に採り入れていったことですが、それにはどんな狙いがあったのでしょうか。

社会主義が歴史的に優位性を示し、それで初めて資本主義の方がそこから学んだという関係ではなくて、ロシア革命成立当初から全体システムとしての資本主義の世界体制の側が、いわば予防的・反革命の立場から、つまり、ロシア革命の世界的拡がり防止するという意図を含めて、社会主義の優位性とされたものを採り入れ続けてきたと考えるべきだと思います。ロシア革命を資本主義の側が脅威に感じたことは事実なんです。だから、内政干渉とか干渉戦争とか、経済封鎖、自国内での反体制運動の弾圧をやっているわけです。同時に、革命がロシア以外の国に拡がらないように、普通選挙権の導入とか、労働組合の合法化とか、第一次世界大戦のさきから選挙制の導入とか、あるいは戦時統制経済を継承して

経済計画などいろいろの措置を、相当早い時期から、資本主義システムそのものの中にビルトインしていった。ドイツのワイマール共和国が典型です。日本の一九二五年の普通選挙法と治安維持法の同時成立にも、似た事情が反映しています。

Q ソ連・東欧の事象から、社会主義を全面否定する主張も聞かれる。これまでの社会主義の歴史を見るとき、果たして人類にとってのメリットとされるものはあるのでしょうか。

メリット、デメリットということまで話をしますと、メリットと呼ぶべきものが確かにあります。たとえば、職場における労働者の権利の確立とか、女性参政権の早期実現とか、あるいは社会保険、失業の社会の実現とか。こういう面で、いわば先駆的な役割を果たしたこと自体は認めていただろうと思います。

ところが、社会保険を受ける権利などは、人権論でいうと社会権に相当するんですけども、フランス革命以来のヨーロッパの伝統で言いますと、その社会権は自由権、市民的自由の基礎の上に構成されるというのが常識で、それがワイマール憲法型の人権の発想なわけです。一九世紀的な権力からの自由、いわゆる市民的自由の基礎の上に、権力への自由、参加の権利とか、社会保険とか、福祉とかいうものを積み上げていくというのが、西欧近代が構想した人間解放の筋道であつたわけです。けれどもロシア革命の現実の進行と、一九一八年の勤労・被搾取人

民の権利宣言などを読みますと、いわば自由権の否定の上に社会権を打ち立てるといふ発想があるわけですが。資本主義における自由は「ブルジョア的」自由、ブルジョア民主主義であり、社会主義における自由や民主主義は「プロレタリア的」自由であり、プロレタリア民主主義であり、搾取者を抑圧する自由であるといふ発想は、非常に早くからある。ですから、たとえば旧資本家階級に對しては選挙権を認めないといふ政策が、当初からとられるわけです。これは、政党システムで言いますと、社会主義体制を認めない政党は基本的に許されないことになっていく。具体的には、労働者国家であり、共産党が労働者階級の唯一前衛だからということだけで一党制になっていく。これも、一九一八年の段階でもう始まっているわけです。もちろん、他党が反乱を起そうとしたとか、いろいろな口実がつけられますけど。

そうした流れからすると、いわば資本主義のまったくの反対物としての社会主義を考えているわけで、その資本主義のシステムの中に含まれていた西欧近代の成果とでもいいますか、自由とか人権とかデモクラシーとかに對するレーニン・ボルシェビキ型社会主義勢力の評価は、初めからきわめて低いものでした。資本主義のもとで達成された自由と民主主義を土台としてその上に社会主義を築くというのではなくて、その反対物、対称物として社会主義を構成するという発想が非常に強かったことが、今日の事態を招いた一つのポイントだと思います。逆に生産力の発展、資本主義的生産関係の確立が、なべて資本主義時代の土台のうえに、無限

に発展するはずだとして、農業集団化や強引な工業化が進行されるわけです。

先ほどのメリット、デメリットということ言えば、たとえば労働者の福祉とか社会保障とか失業がないということと、自由・民主主義とか精神の自由というものが、果たして比較できるのか。つまり、福祉はいけれども民主主義がないのはよくない、というような議論がユーロ・コミュニティなんかの段階で出てくるんですけども、そもそもこれは経済的な生活の保障と人間の政治的自由や人権とを天秤にかけるという発想なんですね。つまり次元の違う問題を比較する形になるわけです。けれども、メリットとされた福祉なども、政治的自由や民主主義と對置され抑圧されるならば、それがメリットといえるだろうか、というのが私の根本的な疑問です。思想・表現の自由や、複数政党制とか権力分立という政治制度は、社会保障とか労働権とかと、本来バリエーション出来ないものであったんではないだろうか。民主主義を抑圧して労働者の生活を保障するという発想に立つたところに、ロシア型ないしはレーニン・スターリン型の社会主義思想の大きな問題点があったと思うわけです。

ついでに言いますと、実は一九世紀の社会主義思想はそうではなかった、というのが私の理解です。一九世紀の社会主義思想といっても非常に広いわけですが、要するに、フランス市民革命やイギリス産業革命を背景に起こってきた、広い意味での社会主義思想です。従来、空想的社会主義とか初期社会主義とかよばれていたもので、マルクス以前の社会主義といつてもい

いです。その思想も、オーエンとかフリエとかサン・シモンとか、あるいはブルドンとか、それれ違った色彩をもっていますけれども、社会主義思想の基本的性格は、やはりフランス革命の自由、平等、友愛の理念を地上にいかにして実現して行くかというところにあつたと私は考えているんです。

そのなかの自由の理念だけが膨らんでゆきますと、所有権の自由や営業の自由ということでは自由な市場競争が行われ、貧富の格差が広がってゆく。その事態に対して平等とか友愛とかいう原理で、いわば歯止めをかけるところに社会主義思想の一つのメットといえますか、根本的なオリエンテーションがあつたと思つたんです。それがあつた時期から、財産共同体という理念、それからマルクスの段階になりますと、私的所有の廃棄という理念、あるいは階級闘争という理念に収斂されてゆきまして、しかもそれがプロレタリアートの独裁なり、労働者階級による国家権力の奪取という方向に向かつてゆく。もちろんこの時期でも政治運動としては、普通選挙権の確立とか労働条件の改善ということが、差し当たりの目標なんですけれども、そのプロレスで資本主義的な自由とか資本主義のものでの民主主義というものが不十分である、あるいは偽りである、という觀念が大きくなりました。それは、ある意味では当然でした。つまりこの時代、一九世紀中葉はイギリスでさえ普通選挙権は労働者にはなく、教養と財産のある男性だけの民主主義の限られたものでありまして、ブルジョア支配でない状態では民主主義と異なるプロレタリア民主主義とか、ブルジョアの自由でないプロレタリアの自由とかの觀念が生まれて来まして、それをいわば純粋な形で現実の政治権力の上に実現しようとしたのがロシア革命であり、現存した社会主義のシステムだつたと思つたんです。

ところが、自由とか民主主義というのは、一九世紀後半の社会主義者たちの考えていたものよりも、ある意味では一九世紀前半の社会主義者たちの考えていたものに近かつたと私は思つているんです。要するに、ブルジョアの自由とプロレタリアの自由の間に万里の長城があるわけではなく、その發展の延長線上においてしか本来の社会主義は実現できなかったけれども、そのブルジョアの自由と民主主義を、捨て去るところからプロレタリア独裁なりプロレタリア民主主義が始まるというふうな発想を立てていったところに、大きな悲劇があつたと私は考えているんです。

Q 現存した社会主義には政治的に見て問題があったことはよく分かりました。経済的にはどうだったんでしようか。

そのところが、実は、いまお話しした民主主義の問題とかかわるんです。結局、生産手段の社会化の内容をどう理解するか、ということであつたと思うんですね。先ほどお話しした初期社会主義の流れで言いますと、そこから協同組合運動が生まれていったり、今日流に言えば、山岸とか武者小路実篤の「新しき村」みたいなものを作り出す運動がありましたし、今日にながるものとしては、ナショナルトラストふうの、人々がお金を出し合つてある種の共同所有の形態を作り出すという形もありました。もちろん、アルトマンには自主管理の発想もあるわけです。マルクスにもそのような発想があつたと思ひますけれど、生産手段の社会化というカテゴリーを現実のシステムとして組む際、とりわけエンゲルス、レーニンに典型的なわけですが、社会を一つの工場のように組み立ててゆく。「二国一工場論」と私は呼んでいますが、生産手段の社会化ということで、一つの社会を一つの工場のように組み立てる、その経営主体は国家であるという形で組み上げて行つた。ここに根本的な問題があると思ひます。どういふことかと言ひますと、生産手段の社会化の形態を国有化に収斂させてしまつたことです。まず国家をプロレタリア政党が握つて、その国家権力でもつて生産手段の社会化を実現

してゆくという発想です。それは、プロレタリア独裁という理念、あるいは共産主義前衛党という理念に含まれているものです。これが不幸にも一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけての社会主義の理論の中で支配的なものになつていつた。とりわけ、ロシア社会主義のなかでは、それが極端な形で受け継がれていつた。要するに、生産手段の社会化の最高の形態が国有化とされ、協同組合所有とか、自治体所有とか、労働条件の決定に労働者が参加し発言権をもつ、といった生産の社会化の多様な形態が国有化という形態に収斂されていつて、国家権力の行使主体だけが問題にされたところに、現存した社会主義の大きな不幸があつたと思ひます。しかし、二〇世紀も末の今日の段階で考えますと、初期社会主義の流れはずつと引き継がれていきます。ユーラシアの自主管理も生まれてましたし、それからフリーカース・コルケナイフとか、消費生活協同組合とかの様々な協同組合的な所有の形態とか、北欧福祉国家諸国で見られるような労働者参加の様々な形態、生産点における労働者委員会とか経営評議会とか労働者の持ち株制度とか、あるいは市民運動の方から現れてくるナショナルトラストとか。この種の生産手段の社会化の非国家的形態というものが忘れられ、国家権力による上からの統合、組織化といふところに社会主義思想の事実上の焦点が絞られていつたところに、ロシア型社会主義の非常に大きな問題があつた。

実はそういう形で国家による社会化が前面に出た場合には、その国家権力に労働者がどのよ

うに加わることができるのかという政治的民主主義の問題が、本来最大の争点にされるべきで
した。実際にそこでなされたのは、労働者階級の代表と称する共産主義前衛党がそれに代わっ
て権力を執行することだった。現実の労働者は、ほとんど権力をもたないシステムだった。そ
うだとすると、国家を通じて生産手段を社会化するという発想よりは、個々の職場であるいは
個々の地域で、いかに分権的に生産あるいは消費の社会化を図っていくかという、当初の社会
主義思想に孕まれていた発想の方がむしろ健全であり、かつ現実の労働者の権利拡大とか、あ
るいは分配における成果の公正な配分を獲得する道であったと、考えるべきではなかったかと
思います。

止まぬ民衆の抵抗

Q 将来の展望を伺いたい。社会主義が世界的な政治体制として再び登場して来ることはあるでしょ
うか。

ロシア革命型あるいは共産主義運動型の反システム運動が終焉したから、それでは資本主義
世界システムに対する反システム運動、反抗がなくなるのか、あるいは資本主義が勝利したの
か、資本主義は無矛盾なものかといったら、全然そうではないわけです。私は資本主義シス
テムに対するあらゆる反システム運動が、今日の段階で、新しい社会をつくってゆく源泉で
あると考えています。そこには、もちろん資本主義国の労働組合運動とか、労働者政党の運動
も含まれますけれども、そればかりでなく、エコロジイとかフェミニズムとか、あらゆる抑圧
差別、貧困に反対する運動、平和を求める運動も含まれていると思います。

資本主義は、世界的規模での格差、不平等、不自由を内包しながら世界化、ポスターレス化
してゆくという形で進んでいるわけで、今日、その中心にあるのは多国籍企業です。けれども
こういうシステムの開拓の中で生まれて来る様々な矛盾に対して、民衆の様々な抵抗が止むこ
とはありえないだろうと思えます。旧来のマルクス主義の系統、それからロシア革命以降の
現存した社会主義の系譜の流れは、これを階級闘争ないし生産手段所有の問題に還元してしま
うわけですよ。

ここで、改めて社会主義思想の生まれてきた時代の抵抗の形態を考えてみますと、実に多種
多様であり、理論的にも、生産手段所有の問題やプロレタリアートという階級的主体の問題に、
一元化されるような性格のものではなかったわけですよ。ましてや、二〇世紀から二一世紀にな
るうとしている今日の段階では、南北問題もありますし、民族問題もあります。独立した国家
であっても、先進資本主義国や多国籍企業の経済的支配に対して小さい国が対抗出来ないとい
う経済的従属の問題もあります。男と女の問題は階級対立とは別個の問題として存在しますし、

しかもいまのような形で資本主義の生産力を展開していれば、地球の生態系が存立不可能になつてくる可能性を秘めている。そういう事態のもので、そもそも社会主義思想が生まれる根拠となつたような矛盾は、二〇世紀末の、多国製企業を中心とする資本主義社会のもとでは、より広くかつより多様な形態で展開しているし、地球規模で存在している。

スローガン汚され

しかし、こうした反システム運動を社会主義、共産主義というふうには括することは、恐らく今日の段階では出来ない。現存した社会主義が、社会主義、共産主義を名乗ってきたことによつて、これらの様々な反システム運動がそのスローガンのもとで結びつくことは、もはや二世紀にはあり得ないだらうと思ふんです。私自身は市民社会主義とか、あるいは社会中心主義、地球市民主義という言い方をしていますけれど、要するに市民社会の中から、人々が多様な形で繰り広げてゆく自己解放の運動というイメージです。あるいは従来社会主義が、自由という概念をないがしろにしてきたので、私としては社会自由主義あるいは自由社会主義とよびたいんです。

いずれにせよ、社会主義という名称は民衆の反システム運動のスローガンにはなりにくいだらう。にもかかわらず、そのような反システム運動の展開は二世紀にかけても繰り広げられて

ゆくわけですね。それは思想的、運動史的に言いますと、一九世紀社会主義思想の末裔であり、もつと大きくとりましますと、キリスト教、イスラム教、ユダヤ教、仏教などを含み、人類の解放運動の今日的な展開形態といふことになるだらうと思ふんです。差し当たりは、生産の場と所有と階級の問題に特化した反システム運動を、社会主義と私は個人的には位置づけていますけれど、全体的なスローガンとしては、社会主義というものが現存した社会主義によつて汚されてしまつたので、地球的な規模でのデモクラシー概念なり、市民の概念で括つて、地球市民主義とした

い。じゃあ、社会主義、共産主義はどうかという点、これらの概念を使わなくても、経済民主主義とか生産における民主主義という概念を使うことで、旧来の社会主義思想が考えていた生産手段所有の、あるいは生産レベルでの社会化の問題を取り込むことができる。要するに、名辞としての、呼び名としての社会主義、共産主義が消えたとしても、その中に含まれていた解放的な理念、理想というものは生き続けるだらうし、それを国家主義的にならないような形で、かつ地球規模で繰り広げてゆくのが、今日の段階での、人類の解放を願う者にとるべき立場じゃないかというのが私の考えです。

Q 資本主義はまだ相当永く生きながらえますか？

当然そうだと思います。ただし、社会主義が提起した問題を、つまり一九世紀の反システム運動の提起した問題を、二〇世紀の資本主義世界のシステムが組み込まざるを得なかつたように、二一世紀の資本主義世界システムがもし生き延びようとしたら、二〇世紀の反システム運動、現存した社会主義運動だけでなく、たとえば社会民主主義や協同組合運動や、あるいはフェミニズムの運動や、とりわけエコロジカル運動が提起した問題に対する回答を与えなければ、生き延びてはいけなうと思います。

具体的にいえば、経済成長至上主義とか、物質的な生産力規模、つまりGNPを中心に豊かさを計る発想からいかに脱却するかとか、多国籍企業に対する地球規模での規制とか、あるいは核兵器まで作り出し出したような巨大な科学技術の制御の問題とか、この種の問題に対して今日の資本主義システムがどのように回答を出せるかが問われているということですね。



藤田 勇氏 当初から根底に矛盾

歴史的試みの影響は今後も